

い部分があるのも当然であろう。また多様な要求に対応することは、どの要求にも不十分にしか対応できない結果を生ずる恐れも少なくないのである。

新図書館に設けられる諸施設も、多様な要求に応えてのものであろう。しかし新施設は結構だが、目録・書庫・出納などの基本的部分が、どの程度改善されているのかといえ、開館された上で利用して見なければ何ともいえないように思う。例えば収蔵量の増大のため集密書庫を用いる必要はよくわかるが、それによって図書の検索がやや不便になるといった程度のことは、やはり甘受しなければならないようである。

多様な要求に応えることはむづかしい。ただ1週間から2年までの平均値や最頻値を出すだけで解決したなどとは考えてほしくない。数や統計の安直な利用には心しなければならない。

新図書館の利用には、事前に十分な準備がなされており、関係者の御努力は多ししなければならない。しかし、どれほど周到に準備が行なわれても、所詮新図書館は管理・運営にあたる側でも、利用者の側でもはじめての経験であり、思いもよ

らぬ不備・不便が生ずることは当然予想される。それはやむを得ないことであるが、その場合、不備をすみやかに改善する柔軟さを求めたい。大学のような大きな組織では、成文化された規程だけでなく、慣行すら容易に改められない傾向がしばしば見られる。新図書館の場合、前例や慣行は存在しないのであり、試行錯誤を重ねてそれらを作っていくのだという姿勢が必要であらう。

最後に図書館がどんなにすぐれた施設を持っても、それが周知させられ、利用の仕方が平易に指示されなければ宝の持ち腐れである。ブックディテクション・システムだのA.V.ブースだの始めて耳にする人も少なくなかろう。機械に弱いのに、年をとってから機械につき合わされる身をかこつ文科系中高年教員の一人として、新施設利用法の平明な解説を望みたい。

未知のものへは期待とともに不安も大きい。開館とともに不安が氷解すればまことにありがた。旧図書館のもってきた牧歌的な人間臭さへの愛着はなお捨てがたいが、所詮それらは失われていくものであろう。ただ機械では扱いきれない部分に、血の通った運営を希望する。

—— 資料紹介 —— ①

外国図書(大型コレクション)について

昭和57年度外国図書(大型コレクション)購入費により下記の資料を購入し、附属図書館に蔵置しておりますので御利用下さいませよう御案内いたします。

なお、この資料について経済学部平井俊彦先生に詳しい解説を執筆していただきましたので、御利用の手引きとして紹介いたします。

ゴールドスミス=クレス文庫 —経済関係初期文献集—

経済学部教授 平 井 俊 彦

昭和57年度に、ゴールドスミス=クレス 経済学文庫 Goldsmith's=Kress Library of Economic Literature のうち第1部, Segment I (15世紀から1800年までに出版された文献)のマイクロ・フィルムが、本学中央図書館に所蔵されることとな

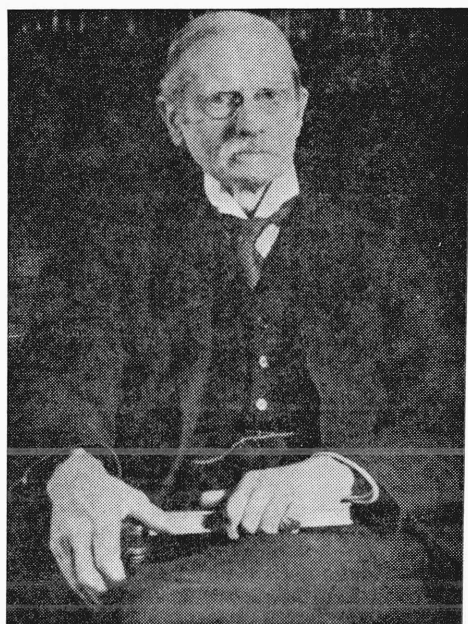
った。第1部に収録された文献点数は、補遺4,000点を含めて約31,000点にのぼる。リール数にして2,028。ちなみに第2部 Segment II (1801-50年に出版された文献) 約29,000点で、1,700リールにのぼる、当該文献に関する世界で最大規模の文

庫である。

収録されている分野は、経済学および経済に係る資料が主要であるが、社会学、政治学、地誌学などきわめて広い領域をおおっている。また、経済そのものについてみても、農業、漁業、鉱山業、土地測量をはじめ、人口、商業、各種の手工業や技術から、航海、海賊、密輸などをふくむ貿易、植民問題、さらには铸貨、古銭、十分の一税をふくむ金融・財政問題、鉄道・海運・運送方法など経済活動に関するあらゆる分野が、網羅されている。のみならず、この文庫は、社会状態や社会制度、たとえば債権・債務関係、刑事学、都市問題、犯罪や労働関係、企業型態、社会主義、各国民の気質、あるいは奴隷制、ギルド、国防、地方行政などさまざまな方面に及んでおり、単に経済学関係のみならず、政治学、行政学、法制史、社会事情など社会科学全体にかかわる、きわめて広く学際的な性格を備えているといつてよい。

すでに、経済学関係の古典的な文庫といえば、経済学部図書室にはドイツの経済学者の蔵書、ビューヒャー文庫(11,466冊)とマイヤー文庫(約26,000冊)をはじめ、上野文庫(約26,000冊)や、河上文庫、財部文庫などがある。実物ではないが、ゴールドスミス=クレス文庫が中央図書館に所蔵されることによって、既存の文庫とあわせ、莫大な経済学関係の初期文献集がみられることになった。この規模は、メンガー文庫やフランクリン文庫などを所蔵する一橋大学に優に比肩するものといえよう。経済学関係の古典文献センターとして、本学の占める役割はきわめて大きくなったといえる。

ところで、この「ゴールドスミス=クレス文庫」は、ロンドン大学の「ゴールドスミス文庫」The Goldsmith' Library of Economic Literature at the University of London と、ハーバード大学の「クレス文庫」The Kress Library of Business and Economics at the Harvard Graduate School of Business and Business Administration in Boston とをまとめたものである。いま、私の手許にある両者のカタログについてみ



H. S. フォクスウェルの肖像

ても、それぞれのカタログが、ケムブリッジとニューヨークで別個に出版されているが、新たに1976年から今日まで、まとめられて Goldsmith'=Kress Library of Economic Literatureとして、ウッドブリッジで4巻まで出版されている。これら二つの文庫は、J. M. ケインズがコロンビア大学のセリグマン・コレクションとともに「世界の三大コレクション」と呼んだものである。三上隆三教授は『経済学事始』(東洋経済新報社、昭57年)のなかで、一橋大学のメンガー文庫を加え、これらを「経済学4大コレクション」と述べている。これらのなかでも、メンガー文庫の約2万点、セリグマン文庫の約3万点などと較べて、本文庫はその数倍にも のぼる 最大規模のものである。

これら二つのライブラリーは、主としてイギリスの経済学者フォクスウェル Herbert Somerton Foxwell (1849-1936) が、ほぼ60年の長きにわたって蒐集した文献が中心となっている。フォクスウェルは1874年にはじめてケムブリッジ大学で講師をつとめ、1877-85年にマーシャルの不在の間にその代講をおこなっている。その間、1881年

にはロンドンの University Collge の経済学教授になり、1907年には、キャナン Edwin Cannan とともにロンドン大学の経済学教授に任命されている。かれの専門は経済学の一般理論と通貨・銀行論であった。ところで、かれの学風はといえは、先輩であり友人でもあったW.S.ジェボンズとは異なり、きわめて歴史的であり、社会的であった。このことは、彼の有名な論文「イギリスにおける経済学の動向」1887年にみとめられる。かれはこの論文で、経済学はリカードやミルの後継者たちの論じるように抽象的な法則的・普遍的科学ではなくて、制度や支配形態の発展の研究であって、それらが各国民や各時代の経済意識を規定していることを解明するものだ、と主張している。こうした歴史や制度への強い関心が、文献蒐集への意欲を促したのかもしれない。

フォクスウェルが、どのようにして、これほどまでに大規模な文献蒐集をおこなったかは、『経済学文献、ゴールドスミス文庫目録』 Catalogue of the Goldsmith' Library of Economic Literature, Cambridge, 1970 の序文に詳しい。また、三上教授の前掲のエッセイも、その消息を伝えていて興味深い。いま、これらによって、いくつかのエピソードを綴ってみよう。

ケインズが「H.S.フォクスウェル」1936年に書いた記事によれば、1850年を下限として文庫作りを始めたのは、フォクスウェル自身の関心によっていたようである。ところで、フォクスウェルは集書の出版時期として一おう1848年を目安としていた。その後の出版物は、48年以前に関係のある歴史的資料に限られた。フォクスウェルは、その理由を、一つには1848年はJ.S.ミルの『経済学原理』の出版された年であり、二つにはヨーロッパ各地で革命がおこった年だからだ、とつねに述べていたようである。ケインズはこの話に加えて、その翌49年がフォクスウェル自身と現代が生れた年だと、注意をひいている。彼が生れる年以前に出版された文献にのみ関心をもとうとした」と。フォクスウェル自身は、この文庫を「イギリスの産業、商業、貨幣、財政の歴史研究、ならびに経済理論の一般的な発展の研究の基礎として役

立てる」ために蒐集した、と書いている。

ケインズが本文庫の下限を1848年としたのに、実際は1850年となっているのは、どういうわけだろうか。フォクスウェルが初めてコレクション作りにのりだしたのは、1875年ジェボンズのすすめでロンドンのある古本屋から、Larder の Railway Economy, 1850. を購入したときからであった。このとき以来、フォクスウェルは限られた時間と給料を割いて、精力的に本を集めた。フォクスウェルは休日のもとより、昼食の時間や講義時間の合間をぬって、古本屋を訪ねた、かれは電話を用いず、たえず電報用紙と青鉛筆を持ち歩き、ミラノへ出講したときにも、古本屋めぐりをした、集書の虫であった。こうして、25年間に、約3万冊の書物を集めた。1901年に、この蔵書をWorshipful Company of Goldsmith が1万ポンドで買い上げ、これをロンドン大学へ寄贈した。その後もゴールドスミス会社はこの文庫を整理し維持するために資金を提供しつづけ、今日まで「ゴールドスミス文庫」は、ほぼ4万点を数える。

「クレス文庫」のほうはといえば、フォクスウェルがゴールドスミス文庫を売却するとき、重複した書物を4,000冊ほど除いておいたのを、1929年にハーバード大学へ売却した。それと、1913年にフォクスウェルが先の文庫の整理から解放されて、第2回目のコレクションをおこなった成果である。これらは、総計36,000部に上るが、C.W. Kress がその資金を提供したので、この文庫は「クレス文庫」と呼ばれている。今回、これら二つの文庫が重複を省いて、「ゴールドスミス=クレス文庫」のカタログができつつある。ねがわくば、近い日に第2部も収めて、文庫全体の閲覧と利用に供したいものである。

